

油断大敵、

ぼくの名前は、太郎。運動が得意で、足も速い。自分で言うのも何だけど、注意力散漫だ。今日は、幼なじみの花子と、公園で遊ぶ約束をしている。公園に着いた。花子を来た。ぼくが、

「花子、おにご、こをしよう。」
と言った。すると、花子が、
「いいね。そうしよう。時間は三十分ね。」

と言った。じゃんけんで、勝った人がにげる人だ。

「最初はグー、じゃんぽん。」
最初はグー、じゃんぽん。ぽくは、チョキを出して、花子はパーを出した。ぼくが、

「にげるから十秒待って。」
と花子に言った。花子は、

「OK。」
と言った。ぼくは、自信があるので、

「タチさわれたら、言うこと聞くよ。」

と言った。

そして、おにごっこがスタートした。ぼくは、花子が十秒数え終わって、スタートする時に、なるべく花子からはなれておきたい。なので全力で走った。風を切って、走った。ぼくは、

「ここぐらいまで来れば良いだろう。」
と言って、歩き始めた。でも、花子もリレーの選手に選ばれるくらい足が速い。だから、油断はできない。だけど、ぎっぎっき全力で走っ

たから、少しつかれて来た。近くに「かくれるのにちょうど良さそうな、大きい木がある。ぼくは、

（木のうらにかくれて、休もう。）
と思い、木を背もたれにして、地面にすわりこんだ。ぼくは、

「あと二十分でぼくの勝ち。花子のあわてた様子を見よう。」

と言って、辺りをキョロキョロ見た。はじめからはいままで、じっくり見た。でも、花子はい

ない。後ろにもいない。ぼくは、花子のあな
てふためく様子を見たか。たけれど、近くに
は花子がいないと知って、安心した。時間は
あと十五分。ぼくは、こう思った。『
（休んでいたら、もう勝てち。うよじ）
なんだろうか。かかっている。後ろから、落ち葉が
クシヤクシヤとつぶれる音がした。ぼくは、
ゾワゾワとふるえた。』

「何？こわいな。」

と思っ、て後ろをふり返ってみた。なんとそこ
には、花子が、
「みつけた。」

と言っ、て立っ、ていた。ぼくは、とてもおど
ろいた。なぜなら、さっき後ろをふり返った
時は、だれもいなかったから。言葉も出ない
ほどにふるえた。ぼくは、おどろいて、固まっ
てしまった。そして、固まっ、ているぼくを、

花子が、

「タツチ」

と言っ、てつかまえた。ぼくは、タツチされて

しまった。

ぼくは、つかまっで、負けてしまった。す

ると、花子が、

「言うこと聞く人でしょ。コーラ買って来い。」

と言いた。ぼくは、

「ちよ、何言ってるかあかんない。」

と言ったけど、花子がまごくおこってたので、

「すいません。」

と言っで、ぼくはコーラを買ってあげた。

Handwriting practice grid with 20 vertical columns and 20 horizontal rows. A central vertical line with a notch is present.